

# 下北半島 3 町村における地域おこし

澤 藤 奈都子

## I はじめに

### (1) 研究動機と目的

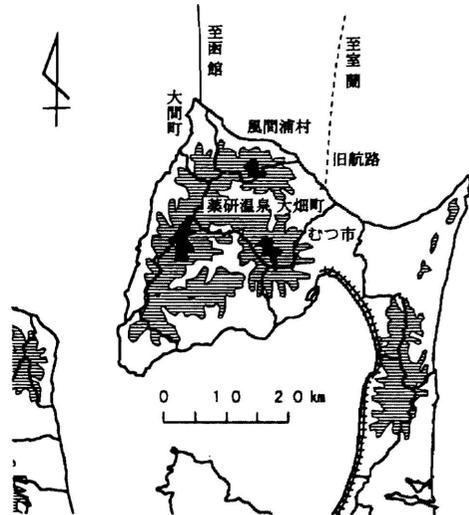
高度経済成長は、国民所得の向上、労働時間の短縮による余暇時間の増大、交通機関の発達などを通じて、観光産業の急速な拡大をもたらした。これ以降、地方でも自治体や地域住民を主体として、地域の特性を活かした地域振興を模索する動きがみられた。これらは「まちづくり」や「まちおこし」、総称して「地域おこし」と呼ばれている。近年、国民の余暇生活に対する関心は高まっており、観光業は地方町村の重要な産業になると期待されている。

そこで本研究では青森県下北半島の北端部に位置する 3 町村（大畑町、大間町、風間浦村）を事例とし、かつては漁業が基幹産業であったが年々漁獲量が減少しており、また、半島という不利な条件下にある町村における地域おこしについて考察する。

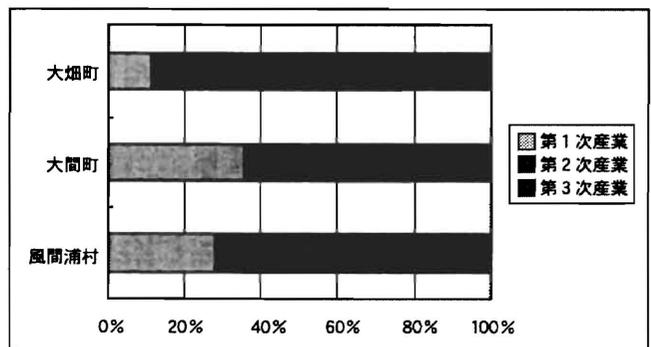
### (2) 研究対象地域

下北半島は、青森県の北東部に位置する本州最北端の半島である（第 1 図）。交通の面では、むつ市と大畑町を結んでいた鉄道（下北交通）が 2001 年 3 月に廃線となったため、それ以北の交通手段は自動車を除けばバスのみとなる。海上では大間－函館間がフェリーで結ばれている。

戦後の人口変動をみると、現在まで減少の一途をたどっている。全人口に占める高齢者の割合も高く、若年層が流出し過疎化が進んでいる。産業につ



第 1 図 対象地域



第 2 図 1995 年の 3 町村の産業別人口（国勢調査より作成）

いてみると、大間町・風間浦村の2町村は現在でも第1次産業の比率が比較的高い（第2図）。青森県の第1次産業の中心は農業であるが、下北地区では平地が少なく、夏にはやませが吹き気温が低下するため漁業が大半を占める（第3図）。この地区の産業を担っていた漁業だが、人口減少や高齢化に伴う就業人口の減少により衰退してきている。第2次産業は大畑町が高いが、これは地元で獲れたイカの加工所や製材所が立地しているためである。出稼ぎ者は一時増えた時期もあるが、これも就業者数の減少に伴い減少してきている。しかし地元で雇用の場が少ないため、依然出稼ぎに依存していることは否めない。

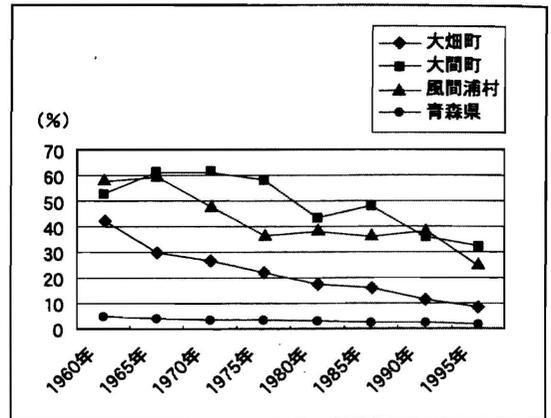
## II 3町村の入込み数の推移

地域おこしを考察するにあたり、まず3町村の入込み数の推移について考察する。

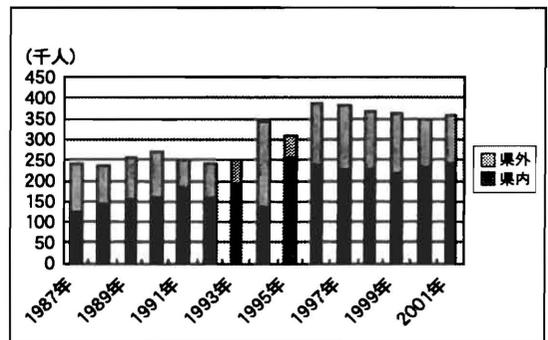
### (1) 大畑町

1971年に国民保養温泉地に指定された薬研温泉郷が観光の中心である。奥薬研には露天風呂である「かっぱの湯」、「夫婦かっぱの湯」があり、無料で入浴できることから年々利用者数が増加してきている。

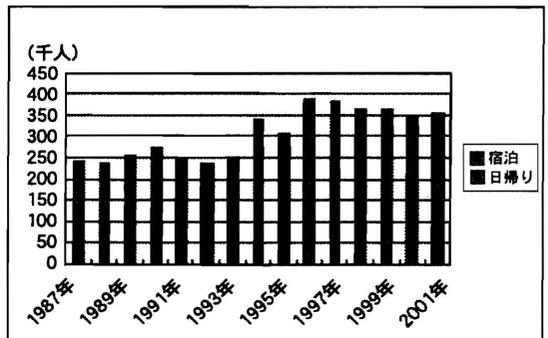
入込み数は1996年から増加したが、近年は減少傾向にある（第4図）。大畑町の入込み数は、ほぼ薬研の入込み数と同じである。県内客が多くを占め、宿泊客が少ない（第5図）。県内客は自家用車での観光が多く、遊歩道を散策し温泉に入り、日帰りするという通過型になっている。県外からは宿泊客が多く、特に首都圏からの客が多い。



第3図 漁業従事者の割合の推移 (国勢調査より作成)



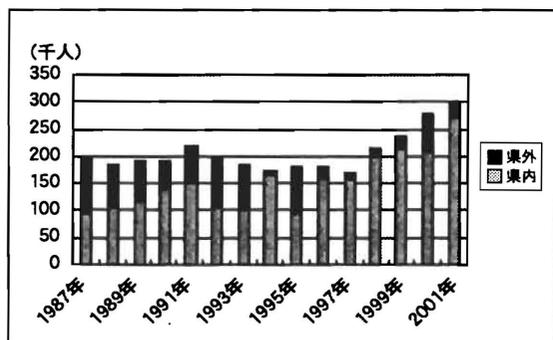
第4図 大畑町の入込み数の推移 (県内・県外)  
(青森県観光統計概要より作成)



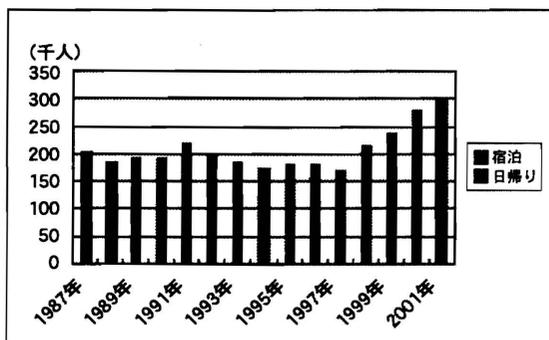
第5図 大畑町の入込み数の推移 (日帰り・宿泊)  
(青森県観光統計概要より作成)

## (2) 大間町

2000年4月から9月まで放映されたNHKの連続ドラマ「私の青空」で、まぐろの町として全国的に有名になった。その影響で2000年は県外客・宿泊客が大きく伸びた(第6図、第7図)。ドラマが放映されてからは家族連れや若いグループなど幅広い年代の人が訪れるようになった。しかし、それは一時的なもので県外客・宿泊客の継続的な増加にまでは至っていない。大間町の宿泊施設のうち温泉を有するものは町が運営する大間海峡保養センターの1軒のみである。そのため、大間町の宿泊施設は観光客に物足りない印象を与える。このことから、大間町も大畑町と同様に通過型観光地となっている。



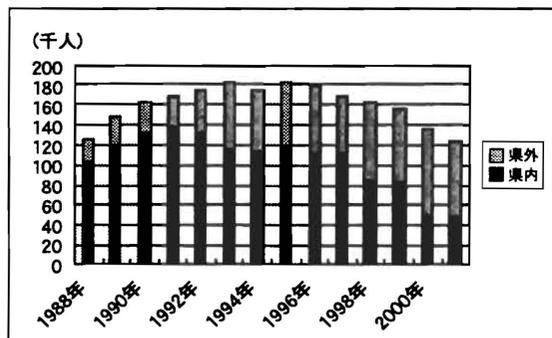
第6図 大間町の入り込み数の推移 (県内・県外)  
(青森県観光統計概要より作成)



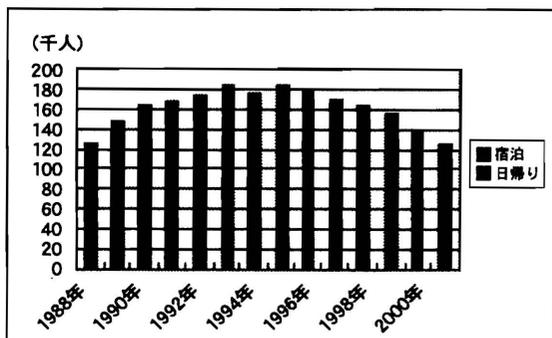
第7図 大間町の入り込み数の推移 (日帰り・宿泊)  
(青森県観光統計概要より作成)

## (3) 風間浦村

風間浦村は、イカが特産である。活イカ備蓄センターでは、活イカをその場で味わえるほか、観光案内所の機能も備えている。このセンター前で毎年7月から11月の上旬まで「元祖烏賊様レース<sup>いかさま</sup>」が行われている。冬季は「布海苔採り体験ツアー」がある。また村内には「いさり火の見える温泉」として名高い下風呂温泉郷がある。全体の収容人員は935人と比較的多いため、大畑町・大間町と比較すると宿泊客が多い(第8図・第9図)。1987年頃は宿泊客のうち団体が7割・個



第8図 風間浦村の入り込み数の推移 (県内・県外)  
(青森県観光統計概要より作成)



第9図 風間浦村の入り込み数の推移 (日帰り・宿泊)  
(青森県観光統計概要より作成)

人が3割だったが、2001年はそれらが逆転し団体が3割・個人が7割となっている。全体の入込み数は1995年を境に減少傾向にある。

### Ⅲ まちおこしへの取り組み

3町村とも一時的に入込み数が増加したが、近年は伸び悩んでいる。町や民間、個人でも現状を打破し、観光客を取りこもうと様々な活動をしている。そこで以下では各町村の取り組みについて考察する。

#### (1) 大畑町

行政の取り組みは施設・環境の整備が中心である。老人福祉センター、レストハウス・露天風呂・修景公園のかっぱの像を葉研地区に建設している。1988年に作られた大畑木材工芸センターでは、樹齢200～300年のヒバを森林管理署から仕入れ、特産品であるイカの形のまな板などをつくり販売している。

商工会では、海峡サーモン・イカスミラーメン・地酒など特産品の開発をしている。1994年からは「ビッグフィールズ」と題した町の特産品の詰め合わせの通信販売も行っている。毎年6月に大畑漁港で開催している「大畑海峡サーモン祭」では海峡サーモンの1本釣りやサーモンレース、即売会などが行われ、海峡サーモンをPRする場となっている。

葉研の宿泊施設では協力体制を強化しようと葉研旅館組合を設立している。しかし4軒と数が少ないため、町の観光協会と連携してパンフレットを配布するなどの活動をするに止まっている。

#### (2) 大間町

行政の取り組みとしては、本州最北端の海岸整備や大間崎レストハウスの建設など施設・環境面の整備がほとんどで、要望があればサポートするという形をとっている。町は他にも、大間海峡保養センターの建設及び管理組

合への業務委託、地酒「いも焼酎」の開発を行っている。また8月には港祭を開き、まぐろの解体や船競争大会、花火大会を行っている。

民間では「青空組」と「やるど会」という2つの団体が組織されている。構成員は、役場職員、会社員、小売店主など様々でそれぞれイベントを開催している。

個人でも特産品の開発が行われ

第1表 風間浦村大規模観光キャンペーンの内容

平成3年	第1回	①活イカすくい大会 ②観光懇談会 ③パンフレット配布	活イカ600匹
平成6年	第4回	①元祖 烏賊様レース ②活イカすくい大会 ③風間浦村特産品販売 ④パンフレット配布	活イカ700匹
平成12年	第10回	①元祖 烏賊様レース ②風間浦村特産品販売 ③パンフレット配布	活イカ100匹

風間浦村役場への聞き取り調査より

ている。本州最北端の小売店主であるA氏はまぐろラーメンやまぐろのかまどろ、ドラマに登場した「べこもち」などを商品化して販売している。またホームページやゆうパックでの通信販売も行っており、常に消費者のニーズにあったものを発案し提供している。このA氏の協力体制を強化しようという呼びかけで、2003年度に本州最北端の旅館・民宿・小売店の計12店舗が加盟した組合が発足する予定である。

### (3) 風間浦村

1991年から商工会、観光協会会員、漁協、役場職員が中心となり「風間浦村大規模観光キャンペーン」を実施している（第1表）。このキャンペーンは東京で行われており、元祖烏賊様レースや特産品の販売、パンフレットの配布が主な内容となっている。元祖烏賊様レースは特許庁に商標登録されているため、村独自の付加価値のついたイベントといえる。この烏賊様レースは村内でも開催している。予約をすれば開催可能となるが、予約客数が少ないのが現状である。他にも風間浦村では、冬季間の入込み客減少の対策として漁業協同組合の協力を得て1994年度から布海苔採り体験ツアーを実施し、毎年200名以上のお客の入れ込みを図っている。

### (4) まとめ

どの町村も特産物を生かした商品開発やイベントを行っている。しかしそれがどこにでもある商品やイベントならば話題にはなってもすぐに飽きられてしまう。大間町はドラマで話題にはなったが継続的な増加にまで至っていないのは、やはりもう一度来たいと思わせる独自のイベントや商品が少ないからである。そういった意味で風間浦村のように商工会、旅館などが連携し付加価値のあるイベントを創造することが必要である。

## IV まとめ

本来的には特産物づくりは、自主的な運動であるべきである。それを推進する力はあくまでも地域の内部からわきあがる力であるが、それを燃焼させるためには、まず、リーダーの掘りおこしが必要ではない。そのリーダーが仕掛け人となって新たなものを創造し、地域が活性化されなければならない。風間浦村のように、行政・漁業組合・観光協会・旅館など様々な機関が連携してひとつのものを作り上げていくという体制が強化されなければならない。

特産物は、地域の風土性に制約されるために特殊なものであり、その地域にしかないものであるために消費者の興味をそそる。大間町のべこもちのように、古くからあるものがテレビの放映により人気を博することもある。すなわち、地域にある伝統的な特産品を時代感覚で見直し、個性豊かな特産品に育てるよう配慮することが重要である。また3町村には、特産品を販売する施設が少ないため、共同で即売会を開くなどの取り組みも必要になってくる。

3町村は、津軽海峡に面した漁村である。その資源を生かしたイベントを開催するべきである。

特に近年は観光客が見て宿泊するだけでなく、実際に参加し体験できるイベントが求められている。そのため、いかの掴み採りやまぐろの重量当てなど漁村ならではのイベントを考案するべきであろう。また、津軽海峡を隔てて北には一大観光地である函館がある。そこでパンフレットの配布などを行い、下北半島の知名度を上げ、観光客を呼び込む努力も必要であろう。そして、そのイベントや観光資源をPRする場を設けること、エージェントへの売込みが重要になってくる。

### 【謝 辞】

本稿作成にあたり、大畑町・大間町・風間浦村役場の方々に貴重な資料を数多く提供して頂きました。また、御指導・御助言を頂きました後藤雄二先生、小岩直人先生に心から感謝致します。

### 【参考文献】

- ・神谷秀彦（1993）：高冷地山村長野県開田村の観光地化，人文地理，45-1，68～82
- ・筒井一伸（1999）：中国地方の過疎山村における一地域振興の実態分析一内発的發展論におけるチェックポイントを用いて一，人文地理，51-1，87～103
- ・青森県立郷土館（1991）：第2回地域総合展「しもきた」叢書 下北半島，231ページ
- ・大畑町企画財政課（2002）：大畑町勢要覧，67ページ
- ・下北総合開発期成同盟会（1984）：「下北地域における特産物の開発と具体化について」，62ページ
- ・総 理 府（1995）：観光白書，391ページ